

受験体験記からみた小学校教員検定合格者のライフヒストリー（1）

内田 徹*

1. 緒言

本資料は、昭和戦前期に小学校教員検定・試験検定を利用して免許状を取得し、その後、教員となった内田（旧姓：田口）ハル（以下、田口ハル、1915～2008年）の手記である。

受験・合格体験記や手記は、試験の実態に迫る有力な資料である。本稿と関わっては、特に文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験（以下、「文検」と略記）研究において活用されてきたことが注目される¹。内容は執筆者により様々であるが、学歴や職歴、受験動機、受験勉強の方法、試験の様子などが記されていることが多い。しかし、初等教員検定史研究において受験・合格体験記や手記を用いた本格的な研究は蓄積されてこなかった。

こうしたことから、笠間は、初等教員検定試験制度の運用実態を解明する必要性を次のように述べている²。

「この他にも検討すべき課題は多いが、紙幅が限られているので摘記するにとどめたい。（一）無試験・試験検定ともに応募者は多かった。彼・彼女らはそもそもいかなる動機から検定に応募し免許状の上進に励んでいたのか。各種講習会の熱心な受講が小学校教員の特性だったとしても、それはただ単に職能向上という動機だけだったのだろうか。これは教員のメンタリティーにかかわる問題である。」

船寄も、受験生の側から見た小学校教員検定制度の意味を解明する必要性を指摘しており、そうした検討に際して、小学校教員をめざす場合と、小学校教員資格をステップとしてさらに「立身出世」をめざす場合の二通りの受験動機があるとし、この点に留意した分析が必要であることを述べている³。

これらの指摘に答えるべく調査を始めたところ、田口が早稲田大学出版部発行の講義録「高等女学講義」附録雑誌『新天地』（継続前誌『早稲田』）に合格体験記を寄稿していたことがわかった。合格体験記には、受験に至る経緯、教員免許状取得までの過程、当時の心情などが記されており、検討に値するものであると判断した。

そこで、筆者は田口の合格体験記を手がかりとし、『埼玉県報』や『埼玉県学事職員録』等を用いて客観化することを通して前記の課題に迫ってきた⁴。

その後、さらなる資料渉猟の結果、「実話 苦闘」と書かれた田口の手記が見つかった。

この手記は、田口の遺族が保管しており、2014年1月に筆者が複写および聞き取り調査

の機会を得た⁵。何かの下書きとして記されたものと思われ、400字詰原稿用紙96枚、冒頭に「39才」と記入されていることから1954年ころに書かれたものと思われる（表1）。

表1 田口ハルの手記「実話 苦闘」の目次

生い立ち・・・・・・・・・・	1	教育道に精進・・・・・・・・	39	退職・・・・・・・・・・	71
勉学の動機・・・・・・・・・・	2	正教員合格・・・・・・・・・・	42	夫の出征・・・・・・・・・・	74
勉学時代・・・・・・・・・・	3	転任・・・・・・・・・・	49	洋裁研究・・・・・・・・・・	82
上京苦学を決意・・・・・・・・	24	母の死・・・・・・・・・・	52	副業養鶏・・・・・・・・・・	86
就職難時代・・・・・・・・・・	26	小学校教員講習・・・・・・・・	56	現在・・・・・・・・・・	91
小学校に奉職・・・・・・・・	29	母校に教鞭を取る・・・・・	60		

その内容は、上述の合格体験記の内容をより詳細に記しただけでなく、田口が実際に小学校教員として勤務するようになった経緯や教員免許状取得後の免許状上進、そのための小学校教員検定の利用方法が記されていた。

2. 小学校教員検定受検に至る経緯

田口ハルは、1915年8月17日、埼玉県北埼玉郡田ヶ谷村（現在の加須市）の米穀商田口伊三郎・ハツの家に4人弟妹の長女として生まれた。1922年に田ヶ谷村立田ヶ谷尋常小学校に入学し、1928年3月に同校を卒業すると組合立騎西高等小学校に進学した。手記によれば、「いつも『教員』の二文字が刻みついてゐた」とされ、当初から教員志望であった。

しかし、田口が学んだ小学校には師範学校進学者はおらず、高等女学校進学者は3年あるいは5年に1人という状況であったという。こうした地域の状況や家庭の事情により、田口は師範学校一部や高等女学校への進学を断念した。

ところが、ある新聞の記事が田口を小学校教員検定受検へと向かわせることになった。

田口は新聞に掲載された、尋常小学校卒業で「文検」に合格した女性の記事を読み、教員志望の実現へと動き出すことになった⁶。

3. 講義録「高等女学講義」による独学と埼玉、群馬2県の小学校教員検定を受験

手記からは、1933年に早稲田大学出版部の「高等女学講義」に入学を申し込んだことがわかる。そして、この講義録の付録雑誌により、小学校教員検定の存在を知ったという。

さて、田口は、こうして小学校教員検定の存在を知ると、まもなく埼玉県の小学校教員検定試験を受験し始めた（1933年6月）。さらに、1935年8月からは埼玉県だけでなく群馬県の小学校教員検定も受験するようになり、1935年12月に尋常小学校准教員免許状を取得し

た。これらの試験検定受験に関しては、いずれも『埼玉県報』及び『群馬県報』において実施が告示されていたことを確認することができた。

手記には、その後、小学校専科正教員免許状へと免許状を上進すべく小学校教員検定を利用したことが記されている。さらに、「小学校教員講習」の受講を経て1941年から母校の田ヶ谷国民学校訓導として勤務するようになったことも記されている。

ただし、手記には、一部に時期が明記されておらず、現在までに確認できない点があった。時期の特定や記述内容を『埼玉県報』や『群馬県報』、『官報』等の資料で裏付けるべく調査を進めている。具体的には、小学校専科正教員受験に関しては群馬県立文書館所蔵文書を確認できていない。そして、「小学校教員講習」については埼玉県の開催・実施状況を調査・分析する必要がある。今後、これらの記述に関しても確認し、より詳細に検討していきたい。

本稿では、『埼玉県報』や『群馬県報』、『埼玉県学事関係職員録』（各年度、埼玉県立図書館所蔵分）により確認することができた、「生い立ち」から1933～36年にかけて小学校教員検定・試験検定を利用し、尋常小学校准教員免許状を取得する「就職難の時代」までの部分を資料として掲載した（表1参照）。田口の手記の公表は、冒頭に述べた初等教員検定史研究の課題に迫る基礎的資料を提供する点において研究進展の一助になると考える。

注

- 1 佐藤由子『戦前の地理教師—文検地理を探る—』（古今書院、1988年）、寺崎昌男・「文検」研究会編『「文検」の研究—文部省教員検定試験と戦前教育学』（学文社、1997年）、井上えり子『「文検家事科」の研究—文部省教員検定試験家事科合格者のライフヒストリー』（学文社、2009年）、亀澤朋恵「「文検図画科」教員のライフヒストリー—武藤完一の場合—」（『日本教育史研究』32号、2013年、72-94ページ）、同「受験体験記から見た「文検図画科」の受験像」（『美術教育学研究』49号、2017年、129-136ページ）、など。
- 2 笠間賢二「小学校教員検定制度研究の必要性」『日本教育史往来』165号、2006年、ほか。
- 3 井上恵美子『平成14-17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書 戦前日本の初等教員検定に求められた教職教養と教科専門教養に関する歴史的研究』、2006年、58-59ページ。
- 4 内田徹「昭和戦前期の女教員の小学校教員検定利用に関する事例研究」丸山（研究代表者）『平成29年度～令和3年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告（中間報告書） 戦前日本の初等教員養成における初等教員検定の果たした役割に関する歴史的研究』、2021年、149-158ページ。
- 5 その後、23ページが欠落していたことが判明した。改めて、当該ページの複写を依頼したものの、現在まで実現していない。後述の資料においても明記した。
- 6 調査により1932年12月28日『東京日日新聞』20254号、8面の記事と確認できた。

凡例

- ・資料は、原則として、仮名づかい、送り仮名、句読点は原文のままとした。
- ・判読難字は■で示し、空欄は□で示した。空欄にルビが付された字句はその通り記した。
- ・誤植、誤用あるいは疑義のあるものには「ママ」をつけた。

資料

実話 苦闘 埼玉県北埼玉郡騎西町外田ヶ谷

埼玉県 内田ハル (39才) 無職

● 生ひ立ち

埼玉県北部の一寒村に米穀商人の長女として生を受け、限り無い父母の慈愛の中に成長した私だった。尋常六ヶ年の課程も経て、四人の学友と共に、隣町の一町三ヶ村組合立の町の高等小学校に入学した。四人と言ってもそれは女子だけで、男子は何人だったか記憶してゐないが、何れにせよ其の頃の女子の高等小学校卒業生は、今の高等学校卒業生よりも少い状態だった。六ヶ年の義務教育を受けると、大抵は町の製糸工場に住込みの女工として働いてゐるのが普通だった。

町の高等小学校迄は家から四軒余り有った。徒歩で通ふのと自転車で通ふのと半々位であった。

小学校時代から、「大きくなったら教員になりたい。」と小さき胸に、いつも「教員」の二文字が刻みついてゐた。学窓も終了せんとするに女学校へは勿論、師範一部への希望者も居ないクラスであった。高女迄は二里もあり、且つ私の村では、三年に一人入学する位、本当に教育に対する熱情に欠けてゐた。燃ゆる向学心を抱きつつも、母の弟妹達の養育は、女手一つの母の苦心を想う時、内気だった私は上級学校入学の希望は一言も言はなかった。かくて学び舎を巣立った私は、徒に志望を蹂[□]されたかの感を抱きつつも……家事の手伝ひに余念はなかった。

● 勉学の動機

師走の風が冷たく吹き■び、年の瀬も迫ってきた。高等小学校を卒業して、□年、向学心に燃ゆ乍らも、只漫然と過ごしてゐるやる瀬なき日常を、どんなに心苦しく思つてゐるかわからなかった。

それは忘^{ママ}れ得ぬ師走の夕、昭和□年十二月二十九日、何げなく見てゐた、東京日々新聞の奮闘談、「尋卒にて文検パス、最後の目標は女博士」何たる努力の天才、うら若き二十三才の乙女であった。最初に早稲田大学の女学講義録で学び、専検合格、そして、此の度、文検に合格、しかも昼間は早朝より工場に働く一事務員で有った。私は嬉しかった。「人間は努力あるのみ」もうじつとしては居られなかった。新聞記事によって 早稲田大学の校外生となり得る事を知り、嬉しさに胸は一ぱい、朝食もそこそこに、早稲田大学に見本を請求する手紙を書いた。

それから五六日して、早稲田大学から、女学講義録の見本と附録雑誌である「早稲田」が届いた。「早稲田」によって、始めて小学校教員になる物の存在を知った喜び、小女時代の憧れは私に還り、勇躍しつつ、未来の女教師への憧憬に美はしき希望に燃えた私だった。

● 勉学時代

(一)

それから数日後、女講第一号を手にし、昼は仕事の余暇に、夜は十一時頃迄机に向つた。

三号を手にした時は既に三月、一ヶ月一冊の講義ではとても容易な事ではない。もう女講なんかに頼ってゐては日が暮れて了ふ。

女講が終る迄には、准教員の試験だったら何科目か合格するだろう、と思ひ、三月末、県庁学務課（今の教育局）へ照会した。すると「六月初旬、教員検定試験施行す」との事だった。そして出願期日は四月二十日迄とあった。

目標は「教員検定試験」と私の小さな胸はいやが上にも高鳴るのであった。「あゝ、どうして検定試験なるものゝ存在を早く知らなかったのか」

と、何度悔いたかわからなかった。何れにせよ、六月の試験に応試して自分の力を試してみたいと思った。試験の問題集を見ると、どうにか解けそうにも思へるが、入学試験と異なり、検定試験である。

それから、東京の神田の本屋に師範学校の教科書を注文した。然しいくら待っても来ない。とうとう待ちきれなくなって、親せきで借りたり、知人に中等学校の教科書をかり、やっと「修身、歴史、理科」だけが間に合ふ頃には、四月下旬になって了った。それ迄に、願書に、履歴書、戸籍抄本、写真を添へて、出願して置いた。

教員の検定試験は、尋准尋正小本正、専科とあった。そして自分の受けたい、例へば、尋正を、一科目でも二科目でも勉強しただけすきに受けられる。そして全教科がパスして初めて免許状が獲得出来る事になってゐる。

高等小学校で使用した教科書も参考にし、注文した師範の本も漸く届き、借りた本とでは、仲々大変だった。「修身、歴史、理科」の三科目を目標に只本を読んだ。昼間は仕事の余暇に少々やる程度では、一向にはかどらない。夜は一生懸命だった。五月中旬になると受験票が届いた。受験票が届いてみると、恐ろしくなって来た。勉強らしい勉強もしないのに、教員の検定試験を受けるとは、余りにも冒険的で、一種いひ様のない感じであった。

五月の日は一日一日容赦なく過ぎて行つた。

六月三日、とうとう試験の朝が来た。早朝起き出でて、先日準備してあった参考書、受験票を持ち、父に駅迄送られて、試験場である浦和市の埼玉師範学校に着く。

青白い顔をして、参考書を手に受験生らしい男女の姿が見える。廊下の片隅で、参考書をひもとく者、椅子にもたれて懸命に鉛筆を走らす者、様々の光景だった。

午前八時、ジリジリと受験開始のベルが鳴る。さしにも広い講堂も受験生で一ぱいだった。だが女子受験者の少いのにには驚いた。尋准、尋正、小本正、専科と別れて所定の位置につく。

第一時は歴史であった。咳一つしない、皆緊張し切った顔、試験官が五六名問題を配布し始める。問題を見るのが只恐ろしかった。「あゝ、神よ、たとへ一科目でもいゝから合格の喜びを与へて下さい。」

と只管祈るのみだった。そして父母の顔が浮かび、
「最後迄がんばれ」

といつてゐる。自分に配布された試験問題もすぐ見るのができなかった。――恐る恐る問題に目を通す、全部で五問。

「あ、よかった」

私は心の中でつぶやいた。歴史は好きな学科であったせいか、一二三四は全部書けそうだ。五問も大たいわかるらしいが、小さい問題が五つも出てゐるので、一寸不安に思ったが、何とか解答出来る自信はあった。時間は二時間だった。八時半になると試験官が、「出場したい者は、退場してもよし」。

といふと、七八人が、こっそり出て行く。多分解答不能の者が出場するらしい。又、後の参考にと問題をもらって帰ると言ふ事を後になって聞いた。

二時間を一ぱいに使って、どうやら全部解答したものゝ、どの程度に書けたら合格か否かが最初の事とてわからず心配だった。この日は歴史だけで私の受験する科目はなく、翌日は修身が有るだけだった。受験場で知り合った行田から来たといふH子さんと共に、福■館といふ旅館に落付いた。

翌日の修身も全部書いた。次の日の理科は六問中、一つ不能が有ったのが実に残念だった。こうして第一回の試験は終了して了った。

三日間の試験に心身共に疲労して家に帰って行った。

毎日考へまいとしても、試験の事が気になってたまらなかった。万一、一科目でも合格してゐなかったらどうしよう、試験前■は、試験場の空気にふれるだけでもと、こんな軽々しい気分であつたのだが、いざ応試して見ると、そんな生やさしいものではない。本当に真けんだった。

七月も半ばを過ぎた。一日一日がどんなにいやな、重苦しい日だったかわからない。七月もとうとう不安と焦燥の中に過ぎて行った。

やまり兼ねて行田のH子さんを尋ねたが、やっぱり何んの通知もなく、やり切れない日常である事を知った。全学科合格者は新聞紙上に発表になるわけだったが、八月初旬になっても発表になった様子はなかった。

「今日は県から合格の通知が来るかな。」

と毎日毎日郵便屋の姿をどんなに待ってゐた事だったろう。たまり兼ねて学務課に問合せたが、又しても何んの返事も来ない。悲しく諦めて、自分の力をどんなにうたがったかわからなかった。あれだけ書いてパスしないとすると、参考書を又買ひ求める外ない、と同時に検定試験の余りにもむづかしいのにあきらめるばかりだった。何れにしても修身歴史は勉強を中止して、来るべき秋の検定に応試すべく他の学科目に全力を注ぐ事にした。

二

八月十日、待ちに待った県からの通知、そして修身歴史の合格証明書は、私をして試験突破に対する確固たる信念を与へて呉れた。たった二科目の証明書ではあるけれど、こうした喜びにしたる事の出来たのは始めてだった。父母の喜びは格別、弟妹迄が衷心より喜んでくれた。

未来の美はしの極地を夢見つゝ、今度は本格的な準備がはじまった。何を勉強するにしても皆独学である。一科目の勉強でも教科書と参考書とでは皆十冊以上になって了ふ。修身歴

史の証明書を得了時は、残る全科目をと思つて準備に取りかゝつたが、あと三ヶ月足らずで秋の試験が始まる。時間は何としてもぎりぎり一ぱいだった。

三

八月と言へば田舎は月遅れのお盆だった。若人連は夜昼よく遊ぶ。丁度其の頃は「笠踊りの全盛期」とでも言いたい様な時で、毎夜の如く、つづみやふえの音が聞こえて来る。若い男女が一しよになって、夜の更ける迄よく踊った。

其の頃、私の家には他所から若い衆が三人来て居た。そしてよく「ハァちゃん、たまには踊りでも見に行かつせいな、何をそんなに勉強してゐるんだい」。と言つてゐた。皆からかい半分だ、若い娘が夜遊びもせずちつ居の生活をしてゐては、世間の人々は様々に批判する。

「今頃勉強して何んになる気なんだらう」

「姉ちゃんは毎日勉強してゐるんだってね。何んになるんだい。」

と弟妹達に迄近所の方が聞く様になった。この様に人々から嘲笑をあげては、是が非でも初志を貫徹せねばならなかった。

其の頃私の家では、三段ばかりの農業をやつてゐた。他人から「勉強してゐる。」と言はれるのが、いやでいやでたまらなかつた私は、時々一人で、なれない手に鎌を持った。若い衆は家の仕事で畑に出る事はなく、いつも日雇人を頼んだのだったが、自分で出来る事はやってやって見ようと思ひ、よく桑畑の草かき等をやった。父母は

「勉強が有るんだから畑なんかやる必要はない、畑をやる時間だけ余計に勉強しろ。」

と言つたが、やっぱり僅かでも、こうしたきまつた仕事をやる方が、生きがいが有る様な気がした。何をするにしても、希望が有ると仕事がどんどんと片づく。畑へ行くにも、必ず参考書持参だった。そして少し疲れると本を読む。疲れて本を読むとは一■本■の様には聞こえないかも知れないが、私にとっては何よりの慰安であつた。

夜になると真^{けん}□そのものだった。いつもふえの音の聞こえて来る頃は、二階の静かな部屋にたった一人で勉強が始まつてゐた。然し暑さと蚊軍の攻撃にはどうする事も出来ず、かやの中へ机を持ち込んでやるより外になつた。若人達が遊んでゐる間に、「どうにかして尋准だけでも免許状を獲得したい。」

と思ふと、酷暑も蚊軍の攻撃も、皆神の試練と思ふのだった。

来る日も、過ぎ行く日も、希望に満ちては居たけれども、楽ではなかつた。数学一科目の勉強だって、幾何、代数なんでも解かなければならない、三十分かゝつても、どうにも解けない問題がある。何がむづかしいと言っても、独学では、数学期むづかしいものは無いと、思ふのだった。連日連夜の勉強に、つい睡魔が襲ふ、そんな時にはいつもきらいなお茶を呑んでは、ねむけをさまして又初める。数学を初めた為か、他の科目がどうしても進まない。とても十二月の第二回の受験には、この分では、何一つとしてパスしさうもない様な気がした。残りの全学科といふ、余りにも無謀な計画に、とうとう数学を捨てる事に決心した。期間が有るなら、どんなに苦心してもよいと思つたが、もう致し方なかつた。

体操の実地には閉口した。家でそっとやるわけには行かず、放課後村の小学校へ行って初めて恩師の御指導を受けた。

遊戯が毎回一つずつ出ると言ふので、学校体操解説によって、小学校一、二年のは全部はって見た。

地理は歴史と同様、好きな学科だけに勉強してゐておもしろい。

国語は、古文、現代文、文法、作文と範囲は広い。作文は其の頃、「小学校教員受験」「処女の友」等に時々投書して、大抵一二番にけい載されてゐたので少しは自信は有った。文法は数学と同様苦手の一つであった。

理科は国語以上に広範囲の勉強だ。博物はどうにかやれるが、物理、化学は難関だった。

教育、四冊ある中、教育学の「陶冶論」等は、読んでゐても仲々わからない。教則を暗誦する丈でも何日もかかつて了ふ。

四

深み行く秋と共に、数学を捨てた為か、他の学科は、思ふ様にはかどって行つた。受験迄あと十日といふのに、無理の勉強が祟った為か、手足の関節が痛み出し、とうとう病床に呻吟する身となって了つた。受験前といへば、之迄の勉強の総仕上げと言ふ大事な時期に、病床に有るとは夢にも思はなかつた。下痢か風邪だったら数日中に全快するだらうけど、神経痛では一ヶ月かかるか、半年かかるかはかり知れず、枕辺に参考書を積み重ねて悲歎の涙に暮れてゐた。寝て居て、痛い手にやつと参考書をひもとく位では、どうにもならなかつた。来るべき検定試験は断念せねばならないかと、止め止なく流れる涙をどうする事も出来なかつた。医師は

「急に來た神経痛だから、四五本注射を打つたら快くなるでせう。」

と言つてゐたが、三本打つても、何んの効果もなかつた。不安はつのるばかりだつた。あと一週間、総べてが運命と諦めねばならぬのか。医師の言葉を信じて見たり、悲しく諦めたり侘しい日が続く。

こんな事をしてゐる中に、幾分快方に向いて來た。受験三日前になると、漸く起きられる様になった。然し医師からは

「全身が疲労してゐるから、少しの間勉強は中止した方がよい。」

と言はれた。医師から何んと言はれようが、歩けさへすれば応試せずには居られない今の私の心境だつた。

勉強らしい勉強もせず、明日は試験と言ふ十月三十一日、父母は心配して

「明日からの受験は断念した方がいい」

と言つてきかなかつた。然し私は

「きつと無理しないから」

と固く約束して、応試する事を漸く許された。

十一月一日から四日迄の試験は終了した。病気になる迄は、どんなに秋の検定試験を、期待してゐた私だらう。数学は後日の参考にと思ひ、問題を戴く心算で受けてみたが、

やっと半分位出来たらしかった。他の科目についても、書くだけは書いたが、皆自信が有るとは言へなかった。

五

昭和十一年一月一日、暁の社前に佇んだ私は、今年こそ意義あらしむべく必勝を祈るのだった。

此の間餅つきの時、弟と話したのだったが丁度この年は、
「初詣でをしよう」

と言って、弟と二人、丹前を着て、夜中の三時頃、村の鎮守様へお詣りに行った。其の時近所の方で、今六十才に近いおぢいさんを追ひ越し、一番詣りをしたのを想ひ出す。

今年こそ尋准合格、尋正数科目合格を目標に突進する事を心に誓ふ。

昨年十一月の試験が発表になって、国語、地理、教育がパスしてゐた。理科のパスしなかったのは以外だった。

この頃の私は、尋准だけでは物足りなくなつてゐた。尋准は程度が高いと言っても大した事はない。十一月の試験の科目合格者が県報に発表になった。それによると科目合格者でさへ余りにも合格者の少いのには驚嘆した。その科目合格者といっても一科目の方が多く、三科目以上の方はほんとうに少なかった。まして女子合格者の余りにも少いのには、おきてて了った。尋准全学科合格者はたった五人、その五人だって、何回行ってパスしたかわからなかった。私の受験票が六二番だったから、何人応募したかわからないが、何れにせよ合格は仲々むづかしい。

今春施行の受験には、尋准、尋正を併願する決心をした。今度の試験には、必ず尋准の免許証を獲得せねばならない。

二月は月遅れの正月だった。一里ばかり離れた神社に、だるま市が有って、老若男女を問わず子供迄みんな行く。小学校の生徒は書初めを書くだけで、十時が過ぎると家へ帰り、だるま市に行くので夢中だった。私もこの日はだるま市に行く心算になって、二里ばかり離れてゐる叔母を久しぶりに訪問した。

道中、同級生や近所の友達数人と逢った。工場へ行った友も、東京へ行った友人も、今日といふ今日は、すっかり見違える様、美衣華粉に色まれて、正に青春の熱情に燃えてゐた。陰ではきっと、白粉一つつけない私を、どんなに笑つてゐた事だらう。

叔父も叔母も夫婦揃つて、試験検定合格者にて、二人共近隣の小学校に奉職してゐた。久しぶりに訪問したので叔父夫婦は喜んで、
「よく受験する気になったね。一日も早く資格を取るんだね」

と言ふ。私はすぐ

「叔母さん達が早く試験が有る事を教へて呉れたったら、今頃尋准位はパスしてゐたったにね」といふと、

「今の若い者は、仲々勉強する者は少いし、まして教員の試験を受ける者は、幾等尋ねたつて、めったに居ないから、まさかお前が受けるとは思はなかった。」

と言ってみた。

私が勉強を初めた時母は叔母さんが若い時、上京苦学をして試験にパスした事を、くわしく記して呉れたから、叔母にだけは、試験については常に文通をし激励されてゐたが、勉強を初めてから逢ふのは初めてだった。

叔母の家にはオルガンが有った。叔母に教はり乍ら、鳩ボッポ、お手々つないで等を引いてみた。随分むづかしいと思ったが、引いてゐる中にか引ける。「あゝ、あと何年たったら希望が実現するのだらう。」

^{がん}
□^{がん} はない児童の姿を連想し限りない空想にふけるのだった。

叔母夫婦に引き留められ、今夜は一泊する事になった。そして試験問題集や、参考書を借り、現在の学校教育の在り方や、就職等雑談にふけるのだった。床についてもねむれない、二人の話にすっかり興奮した私だった。尋准だけでも今年中に取れば、来春の教員異動には採用されるかも知れない。現に尋准で教職にある方が県内に何人か居る事を叔母から聞いた。

ママ
七

二月も過ぎて三月になった。道の辺の雑草にも漸く春のきざしが思はれる様になった。一両毎に桜の蕾がふくらんで、春はいよいよたけなはにならんとしてゐる。この頃より、大体の予定を立て、勉強をはじめた。

四月一日、埼玉県全部の教員の異動が新聞紙上に発表になった。昨年十一月の試験にパスした入間郡のK子さんが、自分の村の小学校に奉職した。同攻の友なる故、衷心より祝福せずには居られなかった。と同時に、私の前途にも大いなる光明をもたらされずには居られなかった。早速「祝奉職」の手紙をかく。

月日の過ぎ行くは

「ひのとび行くよりも早し。」

とか。尋准だけでも数多い参考書なのに、尋正と両方応試しようと言ふのだから、並大抵の努力では合格はおぼつかない。試験前半月位といふものは昼夜殆ど仕事らしい事はせず机にかじりついてゐた。他の科目はどこを出されても解答出来る自信はあった。然し難関は数学であった。代数、幾何もどうやら解ける。四五年間の出題傾向は、ピタゴラスの定理の応用が必ず一二題は提出されてゐた。ピタゴラスの定理も、あきずに、毎日毎日よく同じ事を繰返してはやった。

朝から机に向かい切りでは、夕方になるとすっかり疲労を感じて了ふ。そんな時はいつも、弟妹達を連れて、見沼の清流のほとりを散策した。野も山も■緑に燃え、緑のしとねを敷きつめた堤の、彼方此方には可憐な月見草が雑草にまじって生えてゐる。

(23頁欠)

学校教員免許状は、喜びに震へる私の手に渡されたので有った。余りにも小さき理想を実現したばかりではあるけれど、本当に無量の感、満悦の至りであった。之も扁に、先輩諸氏の

奮闘談の真摯なる意気に鼓舞せられた事と、恩師や父母の恩愛の限りと感謝あるのみであった。それより数日前、尋正 歴史、地理、裁縫合格の報に接した。

秋もたけて、啼く虫の音に一入哀れを催はす十月十四日は、又群馬県より全学期合格の通知が来た。十一月十一日、同じ免許状では有るけれど、群馬県より又獲得した。

● 上京苦学を決意

免許状は獲得したもの、尋准である。正教員の資格を得るには、まだ之からだ、どうしても小学校に奉職してゐなければ、音楽などパスするわけではない、就職難時代に、尋准ではいつ奉職出来るか分らない。余り独学のまゝならぬに、父母に極秘に上京苦学を決意したのはこの頃だった。以前にも何度上京して苦学しようとしたかわからなかったが、両親が許さなかった。でも入学許可の通知が来て了へば、何とか許して呉れると思ひ、悶々の末、矢も楯も堪らず、三月下旬迄と言ふのに、三月三十日、とうとう東京の大妻技芸学校に願書提出した。尋正裁縫が合格して居た為、専門部入学許可の通知が来た。

未来の中等教員（今の高等学校教諭）の境地を、如何ばかり讚美した私だったらう。広い校舎、そして厳格そのもの、女校長の姿を連想し、限りない喜びに胸は躍るのであった。そして苦学の決意を両親に話し、入学許可を見せると、
「入学許可になったのは、本当に嬉しいが、入学することは諦めて呉れ。いくらでも家に居て思ふまゝ勉強させるから。」

と何んと言っても聞き入れてくれなかった。母は女だけに涙を流して、
「一生の御願ひだから、入学だけは、どうしても止めて呉れ。」ときかない。

私は何が何でもすぐ止める気になれなかった。そして最後に、
「叔父さんと叔母さんによく事情をはなして二人が上京した方がよいと言ったら入学させる。」と叔母さん達が反対するのを知つてゐて、両親は仕方なしに、私をなだめる心算で言った。

仕方なく涙を吞んで、気分転□(かん)の気持ちで、再び叔母を訪問した。その時叔母が
「晴天の日だけはないよ。」

と言った。私は突差に、

「総べてわかりました。私の考へはまだ幼稚で、先見の銘が無かつたんですよ。」

と言った。

嗚呼、あの意気軒高たる希望は終に、断念の二字に清算されて了った。何事も、運命と諦めねばならない、忍従の生活よ。

就職難時代 一

教員としては、最底の免許状では有るけれど、獲得してみると、一日も早く就職してみたい。いつもこんな希望で一ぱいだった。叔父から手紙が来て、
「履歴書を二三書いて持って来る様に、欠員でも出来たら、教長先生に頼んで何とか骨を折ってもらふから。」

との事だった。早速履歴書を持参して叔父に御願して居いた。

しばらく経って、叔父からの手紙によると、

「頼むだけは頼んで居いたが、今視学の机上には高女卒業者や、中学校卒業生の履歴書が山積してゐる。然し大部努力してゐる様だから、欠員が出来たら、採用する様努めよう。」との事だった。

村の校長先生はもとより、近くの知ってゐる校長先生には、何人もたのんだ居いた。欠員なんて、そんなに異動期でもなければ有るものではない。

かくして就職線上に立ちて空しく敗れ、味気ない毎日を送つてゐた。

二

九月の初旬だった。突然叔父の訪問に接した。隣村の小学校に欠員が出来たので、わざわざ来て呉れたとの事だった。そして叔父の話では、
「村から希望者も有り、他にも何人か希望者が居るが、女子にて、然も検定試験に合格したのだから、大した努力家だ。採用してみたいが、只距離の問題だが、叔父の家があるから、遠くもよかったら、ぜひ御願したい。」

との事だった。

もう距離の遠近なんか、そんなぜいたくを言っている時ではなかった。一日も早く教壇に立って両親を安心させたい。只、この願ひだけだった。叔父は
「県にて口頭試問が有るから、そのつもりで何を聞かれても即答出来る様にして置きなさい。」

と色々と、自分の体験や注意をしてくれた。

それから数日たって、

「九月八日午前九時迄に、県庁学務課に出頭すべし。〇〇視学。」

との吉報に接した。

九月八日早朝起き出でて、想出の地、浦和市に向かった。之迄の試験場にのぞむのと異なり、何としても実に晴れやかな気分であった。

然し、ほう然として県官の前に立ったのでは、今迄の努力も水泡に帰して了ふ。どんな試問を受けるのかと、内心不安はつる。

丁度九時、私は生まれて初めて、県庁学務課のドアを開けた。大きな部屋には、ずらりと並んだ県官が、皆書類を見入つてゐた。給仕に教へられた、〇〇視学の處に行く。思ったより親切なので、やっと安堵の胸をなぜ下す。

視学は先に届いてゐた私の履歴書を見乍ら（校長から来ていたといふ）二三の口頭試問をなし、小学校奉職後の注意をして呉れた。そして最後に

「すぐ発令するから、辞令を受領したら、すぐ赴任校へ行く様に。」

と言つて呉れた。口頭試問も心配する事なく、聞かれるまを、思ふ随分答へられた。もう辞令を待つばかりであった。

(2021年11月11日受領)